

同志社大学通信

ONE PURPOSE

FOR BETTER COMMUNICATION

特集／自由な時間を活かして、できることは？

同志社人訪問／発展途上国の支援に東奔西走する山森さんに聞く。



No.128

2001 OCTOBER

DOSHISHA UNIVERSITY



COVER STORY

〔表紙の情景〕



屋下がりの今出川キャンパスを歩いていると、どこからともなく美しい音楽が聞こえてくる。同志社礼拝堂(チャペル)で行われている「メディテーション・アワー」のために奏でられているオルガンの調べだ。月曜から金曜までの毎日、午後1時から40分間行っている「メディテーション・アワー」は、美しいオルガンの旋律に身をゆだね、心静かな瞑想のひとつときを過ごしてもらおうとキリスト教文化センターが設けたもので、本学学生はもちろん学外の方々にも開放されている。国の重要文化財である礼拝堂の静謐な空間と、ステンドグラス越しに差し込む神秘的な光、そしてオルガンの音色が、日常から解放された癒しの時間を届けてくれる。入退室は自由なので、気軽な気持ちで一度訪れてみてはいかがだろう。

<土曜日・日曜日、夏季休暇を除く。秋学期はEVE前まで>

C O N T E N T S

特集

**自由な時間を
活かして、
できることは？**

2



同志社人訪問●山森 正巳さん
発展途上国の支援に
東奔西走する山森さんに聞く。

7

留学生の眼

10

2000年度大学決算について

11

ゼミ・ゼミ おじゃまします●神学部 水谷誠ゼミ

旧約的死生観から生命倫理の問題を考える

13

キャンパスニュース & アナウンスメント

15

ONE PURPOSE コメンタリー

21

本学教員の推薦する BOOK&VIDEO

23

私と「仕事」

25

特 集

自由な時間を活かして、 できることは？

大学生に与えられた「自由な時間」。それは、学問はもちろん、スポーツや趣味に打ち込んだり、実社会体験など、自主的な活動を通して、自分を見つけるためにゆだねられた自由裁量の時間なのだ。今回の特集は、この「自由な時間」を活かして、自己の可能性を追求している皆さんを紹介してみたい。

学外に飛び出し、 ネットビジネスに挑戦する。



岩佐和樹さん
経済学部 4年次生

中学、高校と野球少年であった。同志社大学入学後も、軟式野球同好会に入るが、二年次の夏、目を負傷。これをきっかけに大学生生活を考え直し、もっと行動範囲を広げるため、学外に飛び出すことを決意。インターンシップを通して体験したインターネット・ビジネスの世界に将来の夢を託している。

将来、何をするか。どんな会社に入り、どんな仕事に就くか。これを決めるのはとても難しい問題であり、たとえ第一志望の会社に就職したとしても、希望の仕事に就ける保証

はない。だとすれば、自分の興味のある分野でやりたい事業を自らの手で始められれば、これほど理想的なことはない。岩佐さんがこのように考えだしたのは、三年次の夏休み、インターンシップで大阪のインターネット・プロバイダーに三カ月間勤務してからだ。岩佐さんは、入学と同時に軟式野球同好会に入る。二年次の夏に目を負傷しなければ、そのまま大好きな野球と経済学の勉強で、四年間を終えていただろう。しかし、目の負傷は、岩佐さんに将来について考えるきっかけを与えた。退会してまず考えたことは、自由な時間を何に使うか。二年次も秋学期に入っていたので、サークル活動など新たな学内の活動は念頭になく、小学生の頃からパソコン（最初はMSパソコン）に親しんでいた関係で、ETCという学生が運営する非営利団体の活動に

参加してみた。インターンシップを仲介するなどの学生のキャリアアップを目的としたこのETCが提供するプログラムは、かなり刺激的だったようだ。やがて岩佐さんは、学生ビジネスプランコンテストへ参加。インターンシップ先としてプロバイダーを紹介され、さら





に起業家をめざす学生との交流も深まっています。「大学では学べないビジネスアイデアと事業化の知識が僕の中に、どんどん蓄積されていきました」と、当時を振り返る。そうした環境の中で、岩佐さんは尊敬できるビジネスパートナーと知り合うことになる。その人は他大学の学生で、旺盛な事業意欲を持ち、就職の内定を断ってまで、昨年末「ECJUST」という合資会社を立ち上げた。岩佐さんも責任社員という立場でこの創業に参加する。事業内容は、オンラインショッピングサイトとネットサーファーを結ぶコミュニティサイトをインターネット上に開設。ネットサーファーのオンラインショッピングへの要望をリサーチするとともに、オンラインショッピングの各サイトにその情報を提供し、インターネットマーケティングの支援を目指した。会社は、大阪産業創造館の創業支援ブースを借りて活動したが、弊化したばかりということもあって、今の仕事は提携先のインターネット専門店モール「逸品ドットコム」のコンテンツ制作と会



久井義隆さん
工学部電気工学科
4年次生

小学生の頃、父に連れられてはじめて体験した釣り。以来、ほとんど途絶えることなく釣りを続けてきた。現在は本学の釣研究会に所属するが、スポーツ・フィッシングよりも「釣道」にこだわり、時間を見つけては釣りに出かけるという。

時間を見つけて、「釣道」に励む。

員向けメールマガジンの編集。会社には行かず、学業の合間をぬって自宅で仕事をこなす。そんな岩佐さんも、今春になり就職活動に動いた。「学生ベンチャーを目指すのでは？」と尋ねると、「インターネットビジネスは、初期



費用がかからず、サーバーやパソコンがあればどこでも事業展開ができます。就業時間も問われないので学生にとっては起業しやすい条件が揃っています。しかし、それゆえでしょうか、収益計画が甘いようです。学生ビジネスプランコンテストでも感じたことですが、ビジネスの斬新なアイデアを競う傾向が強く、会社を存続させるための人事や財務の管理にまで関心が及ばない」と学生ベンチャーの限界と就職活動の理由を語る。岩佐さんは、一度企業に就職し、会社経営に不可欠な知識を身に付け、社会経験に裏付けられた万全なビジネスモデルを発見してから創業しても遅くないと考えるに至ったようだ。



釣り糸を投げ込んだ瞬間に楽しみの半分は終わる、といわれるように、釣りは奥が深い。その面白さは実際にやった人でないと分からないのだろう。久井さんは、そんな釣りに魅せられて十年あまり、小学生の頃、お父さんに連れられて行った初めての釣り体験ですっかり気に入ってしまったそうだ。まず夢中になったのはブラックバス



「まず釣りに出かけます。それからレポートに
とりかかりますが、切り詰めた時間のなかで集中できるので、かえってはこちらです」とのこと。塾講師のアルバイトもしているのによく時間が捻出できるものだが、ア

ッットしたときの感触やダイナミックなワドのしなりなど、派手な動きのブラックバスは久井少年を虜にした。ところが、悪戯心からルアー(疑似餌)でなく、本物の餌をつけて釣り糸を投げ入れたところ、いとも簡単に釣れてしまった。子供心に「なんだ」と思った瞬間から、バスフィッシングへの魅力は失せてしまったという。といっても、釣りそのものの情熱が冷めてしまっただけではなく、湖沼釣りだけでなく、川釣りや海釣りも経験。その後、磯釣りにたどり着いたそう。現在、久井さんが所属する釣研究会の主流はバスフィッシング。立命館大学との対抗戦や部員たちがめざすプロトーナメントもすべてこれだ。したがって、久井さんの釣りへの嗜好はサークル内でもかなり異色だ。ホームグラウンドは、大阪と和歌山で、ときには遠出をするところもあるが、ほとんどは日帰りできるところだ。時間ができたら、すぐ出かけるそう

で、そのペースは週二、三回にも及ぶ。「工学部ならレポートも多いでしょう」と質問すると、「まず釣りに出かけます。それからレポートにとりかかりますが、切り詰めた時間のなかで集中できるので、かえってはこちらです」とのこと。塾講師のアルバイトもしているのによく時間が捻出できるものだが、ア



ルバイトで得たお金も、釣りの道具代と旅費で半分以上が消えていくそう。で、熱の入れようは半端ではない。

それほどまで久井さんを夢中にさせる釣りの魅力とは何なのだろう。「出かける前には、狙う魚、出かける海岸を決め、そして仕掛けを工夫します。現地に着いたら、潮の流れを読んで、投げ込むポイントを決めます。しかし、びつたりはちたからといって、必ず魚が釣れるわけではありません。相手は、生き物ですから」。このあたりの奥の深さが釣りの魅力なのだろう。釣りをス

ポツとして捉える考え方がありますが、久井さんが目指すところは少し違うようだ。「釣りは、基本的に自分で考え、工夫するものです。が、とくに大切なのは自然を読み解くことです。僕自身、釣りを覚えて得たものはたくさんありますが、最大のものはやはり自然観ですね。道端に咲いた花を見て、『ああ、もうこんな花が咲く季節になったのか』と自然の移り変わりが敏感に感じられるようになりましたと語る。

このような釣三昧の日々を過ごす久井さんの夢は、高知県や宮崎県の沿岸部に生息するという幻の魚アカメを釣ること。「就職すれば、釣り旅行に出ることもなかなかできないと思うので、なんとか学生のうちにチャレンジしておきたいですね」と目を輝かせる。

自ら縫った着物で、 「和」の装いを楽しむ。

八木さんの趣味は和裁。小さな頃から端ぎれで縫い物をして遊んでいたそう。そんな八木さんが、和裁を本格的に意識し始めたのは高校二年生の夏。「今年の祇園祭は浴衣で出かけよう」と友だちと約束し、思い切っ

もとこ
八木智子さん
経済学部 3年次生



高校二年生のとき初めて縫った浴衣。これをきっかけに八木さんは、成人式の振袖や外出用の小紋など、機会があるたびに自分で着物を縫うようになったという。最近では、観劇や百貨店への買い物など、着物で外出する機会も増え、着付け教室にも通い始めた。将来は、着物に関わる仕事に携わりたいと語る。



来栄えはよくなるし、楽しさも増していく。同時に、奥の深さも分かってくる。「和裁は洋裁と違って、型紙はいらないのですが、柄の取り方など、また違った難しさがあるのです」と、その苦勞の一端を説明する。八木さんによると、とくに氣

大学生になると次の目標ができた。成人式に着ていく振袖だ。「最初はレンタルで済ますつもりでしたが、けっこう高価で、試算してみると四回以上着るのなら買った方が経済的だったんです。あれこれ考えているうちに、実家で振袖に使える生地が見つかり、それなら」と自分で縫うことにした。浴衣で自信がついていたこともあって、二年もあれば何とかなると挑戦する意欲も湧いてきた。結局、余裕をもって仕上がったので、襦袢もつくったそう。家族の浴衣や自分の小紋、アンサンブルなどをいくつか縫って練習してから振袖にとりかかった。経験を重ねてきたがって出



をつけている点が三つあるそう。一つは、まっすぐに縫うこと。背縫いが曲がってしまうと全体の形が整わない。二つ目は、襟の曲線、襟元の柔らかい膨らみを出すにはやはり経験を要するようだ。三つ目は、表地と裏地を縫い合わせる飾り縫いで、上手にまち針を打って、これも柔らかく縫っていくのだそう。『和裁の針は、布地を傷つけないようにできています。しかも何種類かあって、縫い方によってそれを使い分けるのです』と、楽しそうに説明する。

八木さんは、大好きな和裁を天職と考えているのだろうか。「先生に『和裁は肩凝りに悩まされるなど、体に悪いので、仕事にするのは勧められない』とアドバイスされました。でも私は、これからもできれば着物に触れていたいと考えています」と語る。今春から始めた着付けの勉強は、そんな八木さんの思いと無関係ではない。現在、着物を着る時は結婚式やお茶会などフォーマルな場にはほぼ限られているが、そういう場で誰に見られても恥ずかしくないようにきちんと着こなしたいと思うようになったのが表向きの理由で、その裏にはできれば

バンド活動を始めて、 学生生活が一変する。

「意外かもしれませんが、勉強ばかりしていましたね」と、高校時代を振り返る木村さん。同志社大学入学後は、その反動から勉強以外の何かに挑戦したくてしかたがなかった

着付けの免許を取り、その上で和裁を続けたという秘めた思いがあるようだ。

さすがに大学へ着物で来るのは恥ずかしいそうだが、百貨店での買い物などには着物で出かけることもある。最近では、狂言を見に行くなど着物を通して趣味も広がってきた。「和裁をやっているという点で、友人たちはびっくりします。ピアノを習ったりもしましたが、結局私には和風のものが入りこみません。ですという言葉からは、八木さんの生き方が伝わってくる。現在、ゼミでは京の伝統職人の技について勉強しているそうで、着物に関わる仕事に携わりたいと考えている八木さんにふさわしい研究テーマが見つかりそう。



という。まず剣道同好会に人会する。心身ともにもう一度鍛え直したいと思ったのが動機だった。しかし、これも自分には合わないと感じた木村さんは、第三劇場に入る。自分を表



現したいと思っていたし、演劇を観るのが好きだったので木村さんにとっては自然な選択だった。しかし、これも脚本や演出に関われないじれったさから退部する。「根気が無かったということもあるのですが、結局自分の関心のあることを一つひとつ確認しながら潰していくそんな感じでした」と、その間の心境を語る。そしてやちと自分の気持ちにじっくりくるものが見つかった。音楽だ。友人のベースに木村さんのボーカル、それにアメリカからの留学生のギターが加わってバンド活動が始まった。音楽をやっている友人たちの演奏を聞



木村耕太さん
商学部 4年次生
(取材時)

剣道、演劇……と、関心事に次々にチャレンジしてやっと見つけた自分にふさわしいもの、それがバンド活動だった。音楽を通して自分を表現できる喜びと、観客から返ってくる確かな反応。木村さんは、水を得た魚のようにバンド活動に熱中していった。

きに行くことはあっても、自分で演奏したり歌ったりした経験のなかった木村さんにとって、すべてが初めての体験だった。主にライブハウスの飛び入りで演奏活動をしていたが、音楽が自分のテンションに合うのが徐々に分かってきた。「実は高校時代、山岳部に所属していました。それはそれで楽しかったのですが、登山は自己完結型のスポーツです。努力のプロセスは誰も知らない。こ褒美は山頂にたどり着いたときの美しい眺望だけ。それだけに、ライブで観客が見せる反応は新鮮で感動的でした」と語る。

しかし、三人のバンド活動もやがて終わりを迎える。大学院で学ぶ留学生は勉強に追われて時間が割けなくなり、もう一人は就職活動で忙しくなった。木村さんも就職活動に入ったものの、何かふさぎれない。せうかく知った音楽の面白さをこのまま終わらせてしまつていいものだろうかと考え、京都の木屋町界隈でギターを片手にポップ・デイルの曲を歌っていたという。その間、レコード店のバンドメンバー募集の貼り紙を見たり、自身もメンバーを募集して、ようやく新バンド結成にこぎつけた。それが四年次の春のこと。バンドの音楽の方向は、メンバー四人の嗜好で決めた。歌謡ロック、ジャズファンク、ブルースなどをレパートリーにオリジナル曲づくりにも励んだ。木村さんは、作



詞とボーカル、そしてマネージメントを担当した。スケジュールやライブハウスとの折衝、スタッフの確保や会計と、忙しい毎日が続く。「メンバーのモチベーションはとて高かったし、僕自身も音づくりよりバンドをどうしていくかに強い関心を抱くようになりました」という。木村さんは、そんな気持ちの高揚感を大切にするために大学を休学し、音楽活動に専念した。京都ミューズホールなど大きなステージにも立つことができた。「あの頃は、バンド活動以外のことを考える余裕がないほど、忙しかったし熱中していましたが、ただ、今にして思えば、技術的にまだまだだつたし、プロへの道は遠かった」と当時を振り返る。現在、木村さんは再び一人でストリートミュージシャンを続けながら、就職活動を再開している。「就職しても、音楽はなんらかの形で続けていきたいですね」と、今も音楽への夢を育んでいる。

発展途上国の支援に 東奔西走する 山森さんに聞く。

国井●今日は米州開発銀行でご活躍の山森さんからお話伺えると聞き、楽しみにしてまいりました。山森さんは、同志社大学と米国のテンプル大学をご卒業ですね。

山森●同志社大学で学んでいた当時は、自分が一体何を学びたいのかもうひとつはうきりしないまま学生生活を過ごしていました。ところが3年次になり、いよいよ就職を考えないといけない頃になると、このまま社会に出るのが不安になり、せめて英語を身に付けよ

うと、米国に短期留学することにしました。

その留学中に受講した文化人類学の授業がすごく面白いです。自分の学びたかったのはこれだと思いました。それまでも、漠然とですが世界の異文化に興味を持ち、本棚にはそうした類いの本がたくさん並んでいましたが、”文化人類学”という明確な形になったのはこのときからでした。私はさっそく担当の教授に相談してみたところ、「同志社で取得した単位は、本学でも有効だから頑張れば二年で卒業できますよ」というアドバイスをいただきました。あとは何とか両親を説得して、米国で勉強を続けることができました。

国井●テンプル大学で文化人類学を修め、アメリカン大学の大学院へ進学されたわけですね。山森●そうです。その頃はすっかり文化人類学に夢中になっていて、もっと専門的に勉強したかった。かといってこれ以上両親の支援を仰ぐわけにはいかない。そんな迷いを抱えながらアメリカン大学の大学院に願書を出しました。私の学びたかった文化人類学は、開発人類学とか応用人類学とかいわれる分野で、民族固有の文化や歴史だけを研究するのでは

やまもり まさみ
山森 正巳さん【1985年 商学部卒業】

1959年、京都市生まれ。現在、佐紀子夫人、長女の涼子さんとワシントンD.C.に暮らす。同志社大学3年次にアメリカのテンプル大学に留学。テンプル大学および同志社大学を卒業後、首都ワシントンにあるアメリカン大学大学院で学び、1987年応用人類学修士号を取得。1988年からユニセフ（国際児童基金）に入り、2年間ペルーに勤務する。1990年から国際協力事業団（JICA）に移り、ケニアに勤務。1992年に帰国し、社団法人海外コンサルティング企業協会（ECFA）に入り主に社会開発分野の仕事に従事する。1996年から再び日本を後にし、米州開発銀行（IDB）の中米グアテマラ支部で内戦終結直後の経済復興支援事業に携わる。現在は、米州開発銀行本部の多数国間投資基金（MIF）で中小企業育成と人的資源開発領域のプロジェクトを担当する。多忙中、今回のインタビューで久々に同志社中学時代から慣れ親しんだ今出川校地を訪れ、懐かしいキャンパスの雰囲気を楽しんでもらえたようだ。



Masami Yamamori

なく、文化的な摩擦が引き起こす諸問題や民族間紛争など、極めて今日的なテーマを対象として、専門アスを設けている大学は米国でも当時は少なかった。幸いにも自分の学びたいコースがこの大学院にはあり、アメリカン大学から、応用人類学を学びたいという日本人はあなたが初めてですから、奨学金を出しましょう」という連絡が入りました。ま

発展途上国の支援に 東奔西走する山森さんに聞く。

さに天佑ですね。

国井 ●大学院をご卒業後、ユニセフに入られましたね。やはり国際公務員をめざされていたのですか？

山森 ●それほど強い目的意識があったわけではありません。当時は、今ほど国際公務員という仕事が目立っていたわけではなく、大学がワシントンD.C.にあったこともあって気楽に応募したところ、採用になってしまった(笑)。大学院で学んだことが生かせる仕事という意味では希望にかなっていたのですが。

国井 ●最初の赴任地は南米のペルーでしたか？
山森 ●今振り返ると笑い話のようですが、採用の決定後、人事の担当官に「ところで希望の赴任地は？」と聞かれました。「ラテンアメリカに興味を持っています」と答えたところ、彼女は南米のペルーを勧めました。「スペイン語は少ししかじただけですが……」と躊躇する私に、担当官は「なにあに、英語が話せれば問題ないし、スペイン語は現地で学校に行けばいい」と即決してしまっただけ。しかし、私を待ち受けていた環境は、担当官の話とは大きく違いました。まず英語など誰も話さないし、話そうともしません。私は、与えられたデスクに座ってただ無駄な時間を過ごすだけ。頭の中は混乱し、後悔の念にさいなまれ、このままではノイローゼになると真剣に悩みました。それを避ける方法はひとつしかありません。必死でスペイン語を学ぶことです。会議でよく出てくる単語を書き写し、家に帰って辞書をひく。時事情報は、分らないなりにとにかく新聞の全ページに目を通し、テレビのニュース番組にかじりつきましました。こんなスペイン

語漬けの生活を六カ月続けて、やっと何とか仕事ができるようになりました。後にグアテマラに赴任したときには、会話だけでなく大臣と手紙で折衝できるまでにライティングスキルも上達しました。

国井 ●発展途上国の支援という仕事柄から、文化人類学が役立つことは想像できますが、同志社大学で学ばれた商学はいかがでしたか？

山森 ●ユニセフを振り出しに、国際協力事業団(ユニセフ)など、主に発展途上国の支援活動を行っていました。その間の仕事の内容は、女性の地位向上や貧困問題が中心で、社会開発が私の専門だと思っていました。個人的にも、草の根的に忍耐強くコツコツと活動することに喜びを見出していたのです。しかし、生活水準を上げるとなると、教育や保健制度の改革だけではやはり限界があります。それを痛感したのが、内紛終結後のグアテマラに赴任したときのことです。荒廃した国を建て直すためには経済活動の振興が不可欠だと分かり、経済や経営的な視点が求められるのです。私は

経済の勉強をやり直すことにしました。社会開発を専門にしてきた者が急にビジネスセンスを身に付けるというのはなかなか難しいのですが、私は商学を学んでいたお陰で抵抗なくビジネス的な発想を受け入れることができました。

その後、グアテマラでの仕事が評価され、現在は米州開発銀行本部の民間セクターで多国間投資基金(FIDIC)による零細企業、中小企業振興を担当しています。

国井 ●日本のODA(政府開発援助)は規模において世界一ですが、その資金が末端にまで届いていないなど、批判が多いですね。

山森 ●いろいろなケースがあると思いますが、個人的にはすべてが末端にまで回る必要はないと思っています。たとえば、政府からの依頼を受けて国営事業の民営化スキームをつくることです。そうした活動は直接は末端にまでは届きませんが、結果として民営化によって国の財政に余裕が生まれ、教育や保健制度の充実につながっていきますから、支援のあり方は多様であっていい。むしろ注意すべきなのは、受け入れ国の事情を考えない支援ですね。一千万円の支援で十分だと考えている国に、十億もの支援をすれば、無駄になるだけでなく、さまざまな悪弊を生むことになりかねません。また、その国が使いこなせないような高度な技術を移植しても、結局何の役にも立たないのです。だから受け入れ国と、対等のパートナー



発展途上国の支援に 東奔西走する山森さんに聞く。

としての対話がすごく大事になってきます。

国井 ● 世界を舞台に活躍されている山森さんの目に、日本はどう映っているのでしょうか。

山森 ● 最初は閉塞感を打破したくて国際社会へ活動の場を求めました。ですから、自分が日本人であるという意味はパスポートの国籍欄くらいにしか見出せなかった。ところが、国際協力事業団の専門家としてケニア赴任した頃から、自分が日本人としてのルーツを見失いかけていることに気づきはじめてました。農業の振興や教育制度の整備をやっていると、やはり現地の人たちが、「こんな場合、日本ではどうしているの?」と聞いてきます。考えてみると、私は二十歳までの日本しか知らない。日本ではどうやっているか、知識がまるでないのです。これはよくないと思います、日本に帰ることにしました。そして社団法人海外コンサルティング協会(OCCE)に職を得て、鹿児島や大分の農村組織の活性化を支援しながら、改めて日本のシステムを学ぶことができました。ECFAではインドネシアやフィリピンにも出かけましたが、ラテン・アメリカやアフリカと違ってアジアの国は、従軍慰安婦問題など日本との間に何がしかの歴史的いきさつを引きずっていて、難しいことが多い半面、国



際社会の中で日本人としてのアイデンティティを確認することができました。

国井 ● 本誌の読者の中にも、山森さんのような国際公務員をめざす人が多いと思います。何かアドバイスがあればお聞かせください。

山森 ● 同志社大学の学生であるとか、日本人であることを忘れてはいけないけれど、その枠に自分を閉じこめて欲しくないですね。私は、同志社大学で送った学生時代を振り返ってとても充実していたと思います。勉強は日本語が分かるわけですから、授業に出ていれば何とかなる。だから自由な時間がいっぱいあって、自分は本当は何をしたいのだろうと考えることができました。一方、米国の学生生活は、いくら勉強しても語学というハンディキップがあるので、絶えず自分にプレッシャーをかけながら夢中で駆け抜けてきた印象があります。社会に出てからも、文化人類学という立脚点に立っていたため、三十代前半まではずっと社会や文化的な視点が大切で、現場に出て細かい地道な仕事をする。ただ、現実はコインの表と裏のように経済や政治の仕組みも重要なんですね。小さな枠組みや自分の殻に閉じこもってしまうと、そうしたことに気づかないまま過ぎ去ってしまう。社会に出ることや国際社会に飛び出すことは、学生時代や日本を否定することではなく、もうひとつ広い視野でものを見て、考えることだと思います。そうすることによって、同志社大学や日本の良さが、違った角度から見えてくるように思います。

国井 ● ありがとうございます。

自分の目標に向けて、着実に前進する、そんな強さ、逞しさを感じました。

難問にぶつかった時に、どうやって解決するかで人柄が出るのだろう。山森さんの話を伺いながら、私はそんなことを考えました。卒業を前にして、短期留学を決意、文化人類学への傾注と大学院への進学。さらにスペイン語という大きな壁にぶつかったときの決断。私は、山森さんがまず冷静で、そしてつねに前向きな行動の人だという印象を持ちました。私自身も、大学卒業後、就職と進学の狭間で迷い、山森さんのスペイン語の比ではありませんが、英語に随分と苦労しています。違いがあるとすれば、状況の厳しさです。山森さんは、自らの意思で果敢にそうした状況に飛び込んでいます。だから、自らの力で障害を飛び越える力が湧いてきたのでしょう。来春から証券会社に入ることが決まっている私ですが、山森さんのアドバイスにあったように、決して狭い枠に自分を閉じこめず、大きなチャンスには果敢にチャレンジしていきたいと考えています。

INTERVIEWER

国井勇治さん

【アメリカ研究科】博士課程(前期課程)2年次生
立命館大学経済学部卒業後、同志社大学大学院アメリカ研究科に入学。日本とアメリカの直接金融について研究中。来年四月から証券会社に就職することが内定。大学では空手に打ち込み、初段の腕前。



チェコから京都、そして世界へ。

経済学研究科博士課程(後期課程)でマロ経済学を学ぶイリ・ヤロシュさんは、チェコのカレル大学からの交換留学生。来日以来、三年が経つ。カレル大学は、六百五十余年というヨ一邸バでも屈指の歴史を誇る大学である。イリさんは、そこで経済学を専攻した。なぜ日本語を勉強しはじめたかについては、寮生活をしてた友人たちとのゲームだったという。「当時、私には親しい友人が二人いました。大



エキゾチックな学科を志望しようというゲームをしたのです。一人はベトナムも、う一人は韓国を選びました。結局、入学できたのは日本を選んだ私だけでした。経済学部に入ったイリさんは、もっぱら日本の経済について研究。チェコには

JETRO(日本貿易振興会の事務局)があり、トヨタ自動車をはじめ日本企業も多数進出しているが、一般的なチェコ人が知っている日本といえば、「フジヤマ」や「ゲイシャ」。イリさん自身も日本の文化や歴史について学ぶ気になれなかったという。「私にとって文化とは、人の心の中にあるもの。形あるものや歴史よりもメンタリティそのものです。だから現在の日本を知るために、日本の経済について学びたかったと語る。

しかし、イリさんが学びはじめた当時は絶頂期にあった日本経済も、その後は急激に減速。今も混乱の中にある。来日以来、研究生活を続けるかたわら、大手電気メーカーで貿易業務にも従事した経験から、イリさんは、日本人観を次のように語る。「日本人はフル・リストです。私が勤務する会社でも、始業時間になるとまず皆で社歌を歌い、社訓を唱える。年功序列は崩れつつあると言われていますが、若い社員が意見を言える場や機会はまだまだ少ないようです」。日本社会についても、「経済的に見ると日本はとても豊かな国です。だから海外に出るととてもリッチで、チェコに来れば欲しいものは何でも手に入ります。でも、日本に帰るとそんなに豊かでなくなりますね。

マイホームの購入や結婚資金の準備に追われて大変だ(笑)。チェコの若者はもっと自立していて、パラサイト・シングルが存在など、とても考えられないと厳しい目を向ける。

現在、京都市内で奥様と二人暮らし。東京や横浜も訪れたことがあるが、日本で一番暮らしやすいのは京都だという。ただそんな京都にも不満があるようで、「私は自宅に数十人の日本人を招待しました。でも、彼らはだれ一人として私たちを招待してくれない。だからこの街で三年暮らししていますが、京都人の実際の生活を知らないのです」と残念がる。来春の卒業に向けて、博士論文の作成に余念がないが、将来についてはまだ未定。研究生活を続けるかビジネス界に飛び込むか決めかねているとか。今のところ母国へのこだわりもなく、オフ・ア・次第では世界のどこへでも飛んでいける覚悟はある。「日本の企業で働くとしても住むのは京都。大阪なら十分通動できますしね」と屈託なく話す。最後に、同志社大学から母校のカレル大学へ留学を希望する学生へのアドバイスとして、「日本でやり方はすべて忘れる」という言葉を贈ってくれた。

Profile



イリ・ヤロシュさん JIRÍ JAROŠ

チェコのカレル大学からの留学生。
現在、経済学研究科博士課程(後期課程)でマロ口経済学を専攻。来日して三年になることもあり、日本の社会に鋭い目を向ける。

2000年度大学決算は、5月10日開催の大学予算委員会および大学評議会、5月26日開催の理事会において承認されました。

2000年度においては、学部・研究科等の教育研究費の増額や奨学援助をはじめとする教育支援体制の充実を図ったほか、図書館などの学生関連施設設備の整備、情報処理教育環境のリプレイスなど教育研究環境の重点的な整備を行いました。さらに、同志社創立125周年記念事業として、記念シンポジウム・ホームカミングデー・記念卒業式などの記念事業を実施しました。また、建設事業として、同志社びわこトリートセンターの建設、文部科学省より学術フロンティア推進事業研究拠点として選定を受けた知能情報センター（香知館）の建設および施設設備のライフサイクルを考慮した、専真館、光塩館、図書館などの改修事業や情報処理施設の整備など特に緊急性の高い施設設備整備事業を優先して行いました。

なお、2000年度決算では、教育研究水準の維持向上を図るとともに、予算の効率的な執行および経費の節減と人件費比率の引き下げ、補助金の新規開拓などにより学費依存率を低下させつつ、財政の改善を図ることができました。

以下、収支計算書にもとづき主な収支の内容について説明します。

収入の部

学生生徒等納付金は243億円で、収入総額に占める割合（学費依存率）は70%をきり、前年度に続き大幅に改善しました。

手数料は12億円で、入学検定料が主なものです。

寄付金は7億円で、教育研究施設等整備資金寄付金、奨学寄付金および機器備品・図書等の現物寄付金のほか、経営大学院宛のオムロン株式会社よりの特別寄付金などにより4億円の増収となりました。

補助金は35億円で、国庫補助金が主なものです。そのうち経常費補助金では特別補助金において教育研究拠点大学院の整備、国際シンポジウムの開催などの新規項目の採択や申請経費の増額などにより増収になりました。また、施設設備対象の補助金においては私立大学学術研究高度化推進事業などの選定により予算額を大幅に上回りました。

資産運用収入は6億円で、基本金引当資産の運用収入および預金等の受取利息・配当金などです。

事業収入は1億円で、企業からの委託研究費などの受託事業収入が主なものです。

雑収入は11億円で、私立大学退職金財団からの交付金収入、同志社創立125周年記念事業に係る企業からの新聞広告協賛金が主なものです。

分担金は1億円で、法人業務および同志社創立125周年記念事業に対する法人内諸学校の負担分です。

固定資産除却額は5億円で、当年度除却固定資産に係る資産取得価額です。

第2号基本金取崩額は6億円で、知能情報センター施設設備取得に係る教学施設整備資金および研究装置設備等整備資金の取崩額です。

借入金等収入は1億円で、学校債発行による借入額です。

特定支出準備金取崩額は19億円で、同志社びわこトリートセンター建設に係る準備金の取崩額が主なものです。

収入の部合計は、349億円となり、補助金の増額などにより予算に対して12億円の増収となりました。

支出の部

人件費は141億円で、支出総額に占める割合（人件費比率）は41%となり、前年度に対し2ポイント低下（改善）しています。

教育研究経費は89億円で、大学の経常的な教育研究活動に要した経費です。主に研究費および実験実習費などの予算繰越による執行残、光熱水費の節減および通信割引契約による通信費削減などにより、予算額を1億円下回りました。

管理経費は9億円で、大学の維持管理に要した経費です。主に経費の節減による執行残により予算額を下回りました。

施設関係支出は24億円で、同志社びわこトリートセンター建設事業、知能情報センター建設事業、空調設備改修事業および情報処理施設、体育施設、通学路の整備などの施設整備事業が主なものです。

設備関係支出は18億円で、教育研究用機器備品・図書など固定資産の取得に係るものです。

借入金等返済支出は32億円で、過年度建設事業に係る借入金の返済額です。私学事業団借入金については定時償還分を、市中銀行借入金については償還計画にもとづき返済しています。

第2号基本金組入額は、組入計画にもとづき、教学施設整備資金12億円、研究装置設備等整備資金2億円、情報基盤整備資金1億円の合計15億円を組入れています。

第3号基本金組入額は、組入計画にもとづき、同志社大学奨学基金に3億円、国際交流基金に2億円を組入れたほか、医療費等援助基金2億円の設定および特別寄付金ならびに基金果実の

（本文中の金額については1億円未満を四捨五入しています）

使用残額など合計7億円を組入れています。

第4号基本金組入額は、法人全体の組入計算にもとづき必要額を組入れています。

特定支出準備金繰入額は5億円で、使途特定寄付金および研究費等の繰越額を決算において繰入れたものです。

支出の部合計は、345億円となり、経費の執行残および予備費の未執行などにより予算に対し1億円の減少となりました。

収支差額

収入の部合計から支出の部合計を差し引いた当年度消費収支差額は、補助金をはじめとする収入の増加、経費の節減および予備費の残余などによる支出の減少により改善され、単年度においては概ね収支均衡となりました。

しかしながら、累積消費収支差額は、依然として多額の支出超過を計上することになり**187億円**の消費支出超過額を翌年度以降に繰越すことになりました。

借入金

借入金残高は、前年度末に対し31億円減少し当年度末の借入金残高は**58億円**となりました。

累積赤字

消費支出超過額は内部資金の不足額であり、借入金は外部資金への依存額です。したがって、この両方を合わせた金額が自己資金の不足額となります。

なお、この自己資金の不足額は前年度末の261億円に対して、当年度末は**245億円**となり、16億円減少しました。

■収支計算書 2000 (平成12) 年4月1日から2001 (平成13) 年3月31日まで (単位: 千円)

収入の部				
科 目	予 算	決 算	差 異	
学生生徒等納付金	24,310,970	24,306,278	4,692	
手数料	1,198,600	1,247,129	△ 48,529	
寄付金	374,390	727,838	△ 353,448	
補助金	2,898,800	3,499,880	△ 601,080	
資産運用収入	479,960	551,420	△ 71,460	
資産売却差額	0	8,904	△ 8,904	
事業収入	105,350	143,895	△ 38,545	
雑収入	1,065,950	1,137,157	△ 71,207	
繰出金	8,820	9,307	△ 487	
分担金	158,850	148,305	10,545	
帰属収入合計	(30,601,690)	(31,780,113)	(△ 1,178,423)	
固定資産除却額	438,300	460,932	△ 22,632	
前年度基本金組入額繰延額	1,480	1,475	5	
借入金等収入	100,000	95,200	4,800	
当期末未払金	0	44,239	△ 44,239	
第2号基本金取崩額	700,000	600,000	100,000	
基本金過年度組入額、未組入額合計	(1,239,780)	(1,201,846)	(37,934)	
特定支出準備金取崩額	1,915,660	1,934,627	△ 18,967	
収入の部合計	[33,757,130]	[34,916,586]	[△ 1,159,456]	

収支差額				
科 目	予 算	決 算	差 異	
当年度消費収支差額	(△ 638,690)	(426,598)	—	
消費支出準備金繰入額	△ 915,120	△ 1,894,922	—	
消費支出準備金取崩額	0	0	—	
繰入取崩後当年度消費収支差額	[△ 1,553,810]	[△ 1,468,324]	—	
前年度繰越消費収支差額	[△ 17,261,150]	[△ 17,261,155]	—	
翌年度繰越消費収支差額	[△ 18,814,960]	[△ 18,729,479]	—	

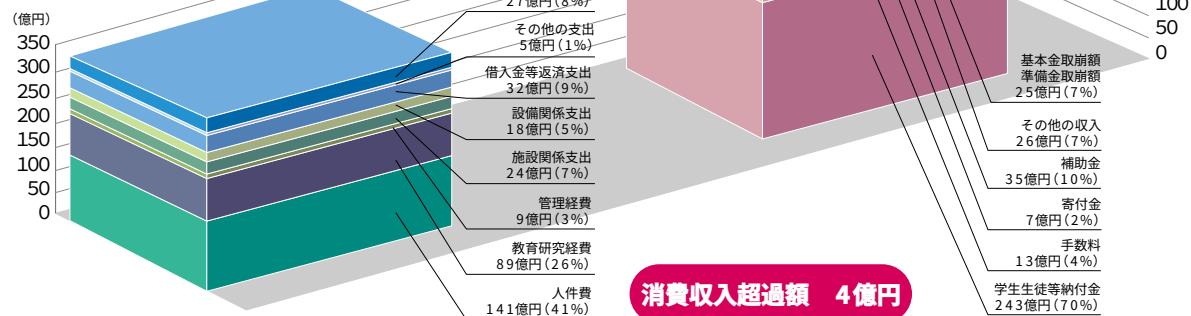
借入金				
科 目	予 算	決 算	差 異	
前年度未借入金残高	[8,860,120]	[8,860,122]	—	
当年度借入額	100,000	95,200	—	
当年度返済額	△ 3,153,290	△ 3,153,487	—	
当年度未借入金残高	[5,806,830]	[5,801,835]	—	

支出の部				
科 目	予 算	決 算	差 異	
人件費	14,000,070	14,092,927	△ 92,857	
教育研究経費	8,984,790	8,899,067	85,723	
消耗品費他	6,310,030	6,224,306	85,724	
減価償却額	2,674,760	2,674,761	△ 1	
管理経費	1,012,210	933,775	78,435	
消耗品費他	926,360	847,930	78,430	
減価償却額	85,850	85,845	5	
借入金等利息	214,650	213,780	870	
資産処分差額	0	22,625	△ 22,625	
徴収不能引当金繰入額	35,290	45,628	△ 10,338	
徴収不能額	0	14,078	△ 14,078	
繰入金	102,360	111,170	△ 8,810	
予備費	100,000	—	100,000	
消費支出合計	(24,449,370)	(24,333,050)	(116,320)	
施設関係支出	2,909,550	2,419,594	489,956	
設備関係支出	1,631,650	1,799,563	△ 167,913	
固定資産受贈額	0	35,901	△ 35,901	
翌年度基本金組入額繰延額	0	0	0	
借入金等返済支出	3,153,290	3,153,487	△ 197	
前期末未払金	26,580	26,575	5	
第2号基本金組入額	1,500,000	1,500,000	0	
第3号基本金組入額	701,100	708,000	△ 6,900	
第4号基本金組入額	1,600	1,600	0	
基本金要組入額、当年度組入額合計	(9,923,770)	(9,644,720)	(279,050)	
特定支出準備金繰入額	22,680	512,218	△ 489,538	
支出の部合計	[34,395,820]	[34,489,988]	[△ 94,168]	

収入合計 349億円
(うち帰属収入 318億円)

■収支構成図

支出合計 345億円
(うち消費支出 243億円)



用語解説

● 収 支 計 算 書 ●

学校法人会計基準にもとづく消費収支計算書においては基本金組入額を帰属収入から控除して表示しているため、収支の内容をよりわかりやすくするために、消費収支計算書に基本金組入計算に係る各項目をそれぞれ収入・支出の部に計上したのが「収支計算書」です。

● 基 本 金 ●

第1号基本金は、学校法人が、教育研究活動に供するため、自己資金により取得した固定資産の価額です。

収支計算書において第1号基本金組入額は、支出の部に取得した固定資産(施設関係支出、設備関係支出、現物寄付資産)の額を表示し、さらに過年度取得した固定資産に係る借入金等返済支出を表示しています。また、収入の部に固定資産取得に係る借入金等収入、固定資産除却による再取得価額などを表示しています。

第2号基本金は、将来取得する固定資産に充てるための資金です。

第3号基本金は、基金として継続的に保持し、その運用果実により教育研究活動の遂行を支援するための資金です。

第4号基本金は、恒常的に保持すべき資金として学校法人会計基準が定める額です。

神学部
[水谷誠ゼミ]
組織神学演習 I

旧約的死生観から 生命倫理の問題を考える

神学部のゼミは、春学期と秋学期に開講される。神学部特有の自由な選択科目制度のため、水谷ゼミの学生も一年次生から四年次生まで多士済々。毎週二人が発表に立つが、あらかじめ作成したレジュメを電子メールで全員に送信しておくため、活発な議論が展開される。今回は、宇田真紀子さんの発表とその後の討論の様子を伝えてみる。



宇田 真紀子さん
3年次生



水谷 誠
【神学部教授】

レポートの概要 現代の生命倫理の問題を、旧約聖書が描く死生観から考えてみたい。考察にあたっては、『死生観と生命倫理』（関根清三他著）を手がかりとしたのでまずその要約をする。旧約聖書には、死後の記述が少なくない。なぜだろうか？それは旧約聖書の時代は、生とは神から「与えられる」もので、神によって「語りかけ」られるものだからである。逆に、死とは神からの「語りかけ」に応じられなくなった状態である。したがって、生に重点が置かれるのである。生の受動性を掘り下げ、そのため『エゼキエル書』三十七章を見る。そこにはまず神によって「場」が与えられ、これによって生えることができるという、完全な受動性の死生観が展開されている。これに対して現代人は、自己を「ユグト的」な意味での主体と捉える。現代人が抱える生命倫理の諸問



水谷先生と組織神学演習 I のクラスの皆さん

題は、この「主体としての自己」から発するものと思われ。私たちが現代人は「生命の質」(QOL)を問題にするが、これを旧約聖書の死生観で捉えようとすると、違ったものになるのではないだろうか。とくに延命治療への反対論として展開される「身体的・精神的・社会的・T-Zの充足度や満足度」はこの「生命の質」を拠り所としており、自己意識のある人を生命の質が高い人、末期患者や脳死者を生命の質の低い人と見なす。こうした「主体としての自己」を前提とした死生観に対し、旧約聖書の死生観では、どんなに辛く、苦しくても神によって与えられた生は、神の祝福の言葉とともにあり、子孫への責任のためにもつねに生き続けたいと願わなければならない。生命倫理論議が行き詰まりを見せる今日、旧約的死生観について考えることは意義あることではないだろうか。

宇田●発表にあたって感じたことは、今日しばしば延命処置が行われる背景には現代人が抱く死への恐怖というものがあるからではないでしょうか。これに対し、旧約聖書時代は、生は神から与えられたものであり、与えられたことへの感謝がまずあるのだという気がしました。

森●旧約聖書がいうところの受動性に始まる生を受け入れるとしても、よりよく生きようとする自分の主体性はどこにあるのでしょうか。

宇田●与えられた生であることを前提として受け入れないと、おごりや高ぶりにつながる





というのが旧約的な考え方です。どこから人間の主体性を認めるかは難しい問題ですね。

水谷●主体性とは、どういう意味か考えてみましょう。英語で「I was born」と言いますね。そもそも私たちは自分の意思で生まれてくるのではなくて、誰かの力によって生み出されるんですね。しかし、誰かの力によって生み出されたということ意識する自分というものが存在するわけですね。すなわち、受動性を受け入れることによって別の主体性が現れてくるとも言えるのです。

辻村●場が与えられて、命が始まると述べています。では、今このとき、無神論者にも場は与えられているのでしょうか。場が与えられていないとしたら、命も与えられていないということですか。

宇田●エゼキエル書には「民としての場が与えられた」とありますが、この場とは、日本



人であるとか、同志社大学の学生であるとかいうアイデンティティのようなもの、有神論者であろうが、無神論者であろうが関係のない、私たちが生きることができる場所ということですね。

辻村●「民としての場が与えられる」というのは、神によって選ばれた者のみが与えられるのだという解釈をしましたが、そうではないんですね。

松尾●場という観点から延命治療について考えてみると、高度な医療技術を使っている生かされるという点では、これもひとつの場と解釈できるのではないのでしょうか。

森寛●その場合、患者の持つている場と、治療を施す医師の場のブレが問題になると思うのです。患者は伝統的な死生観から離れられないし、命を承えさせることを使命とする医師の場とは全然違うものです。ところが、医師が一方的に延命治療を施すことによって患者の場が混乱してしまう。

松尾●現在は、延命治療を施すかどうかを家族に確認をとっているんで、場が乱れるということはないと思いますが、もし一方的に延命治療が行われた場合はやはり問題ですね。

水谷●どうでしょう、可能性として、この旧約的な死生観から延命治療を批判的に見る



ことができるでしょうか。

川合●延命治療を施され、機械につながれて命を承ええる。確かに生きていることは生きているが、その姿が神の意思から考えて正しい姿なのかどうかといえば、正しくないように思えます。

水谷●ごく一般的な旧約的発想でいうと、この世界をコントロールしているのは神であって人間ではない。一方、延命治療というのは人工的なテクニクでもって生き死にをコントロールするまさに人間の技です。しかし、元々とはにも、もっとも人間的なもののは何か、というヒューマンな発想を出発点としているのであるのなら、これをどう批判すればいいのでしょうか。

川合●医師の側にも矛盾があつて、命を承えさせることを使命とする彼らの生命倫理からすると、患者が延命治療を拒否することは、自殺とも映るわけです。私のおじいちゃんは今期癌で現在、点滴と痛み止めで生きていますが、本人の意思で延命治療は拒否しています。

鄭●尊厳死の問題ですね。ある病院での話ですが、同じく末期患者が本人は一日でも長く生きたいと思っていた。でも、家族や周りの人たちの苦勞を考えると、この患者は死を選択したそうです。

水谷●なかなか結論の出にくい問題ですが、宇田さんは難しい問題をよくまとめてくれたと思います。

CAMPUS NEWS & ANNOUNCEMENT

キャンパス・ニュース&アナウンスメント

経済学部・公開授業 「京藍復興にかける 職人の技と心」



「京都における職人の技と歴史」をテーマにした経済学部西村卓教授の公開授業が六月二十八日京田辺キャンパスで開催された。授業は、藍染め職人の橋詰清貴さんを講師に迎えて行われ、生い立ちや京藍の復興をめざすに至った経緯について熱弁をふるった。橋詰さんは、高知県の四万十川の近くで生まれ、恵まれた少年時代を過ごしていた。ところが高校二年生のとき、突然転機が訪れた。自宅が全焼してしまつたのだ。残された橋詰さんは、途方に暮れる余裕もないまま、京都に出て友禅の見習い職人として働く。十年間は、住み込みで夢中で働いた。やがて橋詰さんは立派な友禅職人として成長、独立して百坪の工房を構え、

数々の京友禅の作品を生み出していった。サクセスストーリーならここで終わるのかもしれないが、彼の職人魂はそれだけで満足しなかつた。藍染めに挑戦することを決意したのである。

「私は京友禅の世界で三十年やってきましたが、他の人の五十年に匹敵するくらい夢中で働いてきました。ですから三十年で二つの人生にリリオドを打ち、新しい人生を始めようと決意したのであります。そして、見つけたテーマが、藍でした」とその間の心境を語る。そこまで橋詰氏を魅了した藍染めとは何か。「地球環境を考えても、化学染料の時代はもう終わりました。そこで注目したのが天然染料の、藍です。藍は生きていて、百年経つても、二百年経つても、その魅力は衰えません」と説明する。しかし、京の藍染めは大正末期で姿を消している。橋詰氏は、唯一の天然藍の産地である徳島に赴き、原料を買い



付けて、江戸時代からの技法で藍染めを始める。友禅職人の技を生かして京の藍染めを復興するという壮大な夢がスタートしたのだ。しかし、夢は簡単には実現しなかつた。不作

を理由に、徳島からの天然藍の供給が途絶えた。それならばと、自らの手で天然藍を栽培し、収穫してすくも※をつくり、デザイン、染色まで全工程を京都で行うことにした。すべてが手探りだったが、そこに橋詰氏の情熱を支えるネットワークが生まれた。畑を耕し、藍を植えて栽培し、収穫する。多くの人手を要するこの作業にネットワークの人たちが手を貸した。すくもは、三百六十五日休まず世話をしていないので、家族の協力も不可欠だった。京の藍染めは、こうして復興しようとしている。橋詰氏の藍染めへの取り組みに関心を寄せ、調査している西村ゼミの和田真理子さん、鎌田真也さん、森本哲生さん、丸山真由子さん、滝沢勝哉さんともに四年次生たちは、ネットワークに参画しながら氏のひとりに触れ、何よりもその情熱に共感を覚えたという。

最後に橋詰氏は、自らの試みをベンチャーと位置づけ、伝統にあぐらをかく職人の現状や先端産業の起業家のみに注目する世相を批判し、京の藍染め復興への理解と協力を訴えた。

※藍の葉を発酵させてできた染料

復活をかける硬式野球部



体育会硬式野球部の所属する関西学生野球連盟は新リーグ発足後、今年で二〇周年を迎えた。硬式野球部も昨年の主力選手がほとんど残り、今年の春季リーグ戦は一九七三年以来の全日本大学野球選手権出場（第五〇回）を周囲からも期待されながらの戦いとなった。

しかし、なかなかチームの歯車が噛み合わず、連勝街道というわけにはいかなかった。それでも、粘りのある戦いを見せ、最終節まで優勝の可能性を残した。九年ぶりの同志社V.S立命館での優勝決定戦、一万五千人の観客を記録した同志社・杉浦（日本生命）、立命館・長谷川（マゼラン）両投手の投げ合いが演じられた頃から、同立戦を始め、関西の大学野球界から観客の数が減少傾向にあったが、優勝決定戦となった今季の同立戦は単なる二校の伝統行事とい

うだけでなく、離れていった観客をとり戻し、関西野球界に活気をもたらし、こととなった。

同志社は小南・渡辺・吉田、立命館は小川・村田とともに好投手を擁し、同立戦では投手戦が予想された。しかし、結果は二戦とも同志社投手陣が先に崩れ、二連敗。多くの同志社ファンのいるなか、立命館に胴上げをみせつけられ、二十八年ぶりの大学選手権出場をあと一歩のところまで逃してしまっただけでなく、離れていった観客をとり戻し、関西野球界に活気をもたらし、こととなった。



れば、全国の頂点も見えてくる。秋季リーグ戦こそ体育会硬式野球部が真価を発揮してくれる事だろう。そして、今季こそ、伝統の一戦、同立戦で胴上げを見せてくれることを期待したい。

関西学生野球リーグ秋季リーグ戦

同志社V.S立命館

日程：十月二十八、二十九日

予備日：三〇日

二十八日 十三時

二十九日 十七時三十分

場所：西京極球場（阪急西京極駅降車すぐ）

工事中のクラーク記念館がホームページで復活しました



本学の象徴として、長年親しまれてきたクラーク記念館の改修工事に伴

い、クラーク記念館のホームページがつけられた。

百十八歳になる記念館の改修工事は、今年五月から続けられている。新開で改修工事が報じられ、本学卒業生をはじめ地域の人々からも、その完全な姿を長期間にわたって見ることができないと、惜しむ声が数多く上がっていた。検討を重ねた結果、工事中でもクラーク記念館の完全な姿をインターネット上で見ることができるよう、クラーク記念館ミュージアムを立ち上げた。クラーク記念館ミュージアムには、数多くの内容を掲載している。解説や歴史的資料、四季折々の写真集、クラーク記念館にまつわる話や思い出の紹介、また、記念館内部を見てまわるバーチャルツアーがある。そのため、本学卒業生や地域の人、歴史的建造物に関心のある人など、多くの人が楽しめるコンテンツになっている。

また、いつでも同志社大学を身近に感じることができるよう、携帯電話用の「クラーク記念館の待ち受け画面」や、カレンダーの着メロを用意している。今回の工事は応急処置的で、二〇〇四年から六・七七年をかけて全面補修工事を行う予定。その間、その姿をホームページ上で残すことになっている。

《クラーク記念館ホームページアドレス》
<http://www.doshisha.ac.jp/daigaku/clarke/index.html>

四〇〇m自由形で 日本新記録を樹立 世界を目指す



商学部一年次生の藤田駿一さんが四月の水泳日本選手権兼世界選手権代表選考会で、四〇〇m自由形 一五〇四〇〇mでは日本新記録も達成。シンドニ十五輪代表選手による前記録を一秒近く短縮するという快挙だった。

この結果、東アジア大会、世界選手権およびユニバーシアードへの出場権を獲得「うれしい。無心のまま泳いだのがよかった」といやかに語った。

そして迎えた大阪での東アジア大会「前半から飛び出す自分の持ち味を発揮して、外国勢相手でも積極的に戦いたい」と意気込んでいたが、残念ながら四〇〇m四位、一五〇〇m三位という不本意な成績に終わった。四〇〇mでは、自身がアークした日本記録から九秒もダウン。藤田さんはレース後、「すいません」という一言を残しプールを後にした。

しかし、七月の世界選手権(福岡)の四〇〇m自由型予選で三分五十秒三六をマーク、日本新記録を更新した。決勝では八位だったが、五輪と世界選手権のこの種目で日本選手が決勝に進んだのは三十七年ぶりの快挙だった。

また八月のユニバーシアード北京大会では、八〇〇m自由型で銀メダルを獲得した。

母親が水泳をしていたこともあり、生まれて間もなく水泳を始めた藤田さんは、早くから頭角を現し、学生時代も多くの大会で活躍。そして身長もぐんぐん伸び、今では一八七cm、八十四kgという恵まれた体格に。

今後の目標は、まず国内で記録を出すこと。自身の記録をさらに更新するつもりだ。もちろん、オリンピック出場という大きな夢もある。

のんびりとした風貌や口調からは想像もできないが、「中学・高校時代、同世代に負けることが一番悔しかったと



負けん気の強さは人一倍だ。熱い闘志を内に秘め、世界へ羽ばたく藤田さんを応援しよう。

125周年記念事業新聞広告 が広告電通賞優秀作品賞 を受賞



昨年十月九日の新聞四紙(朝日、読売、毎日、京都)に掲載された、学校法人同志社125周年記念事業の広告が、電通広告賞の教養・娯楽部門で優秀作品賞に選ばれた。

広告電通賞は、昭和二十二年創設以来、広告活動の進歩向上に寄与するため、毎年一回、その年度中の広告作品で優秀な広告企画および広告技術を示した広告主を表彰するものである。国内唯一の年間総合広告賞として広告界のグランプリにたとえられている。

今回の受賞を知った卒業生から、「大きな会場で、同志社の広告が受賞作品として発表されているのを見て感激しました」と喜びのメールもよせられた。

無断借家ですが： ニホンミツバチ



弘風館まえの大きなプラタナスの根元に、私たちの新しい家があります。バイクで通う学生さんたちで少し騒がしい時もあるけれど、どちらかというと木の根元なので、気に入っています。私たちは、ニホンミツバチ。西洋種に押されて、仲間はずいぶん減ってしまったけれど、どこい、都会の真中でシフトク頑張っています。都会には、私たちの天敵のクマもおらず(この前京都嵐山に出たそうです)、こわいのはスズメバチだけ。それでも、戦いは西洋ミツバチよりずっと上手なんです。

体の色は、西洋さんよりちょっとジミ。巣を襲われない限り、刺すことはしません。巣分かれの時、群れで木に固まったりするけど、驚かないでね。まだ巣が無いときは、触られても刺しませんから。

私の夏休み

学生記者レポート

～函館キャンプに参加して～



大学生の夏休みといえば、アルバイト、旅行、それとも勉強……？ 四年間でその全部を経験し、最後の夏休みに私が選んだのが、函館キャンプでした。函館キャンプ（通称・函キャン）は今年で二〇回目。学生課主催のイベントで



松田香織さん
法学部 法律学科 4年次生

すが決まっているのは行きの電車と五日間の宿泊施設のみ。『同志社・新島・函館をキーワードに、函館から脱出して同志社をつかった新島裏の生涯を学び、自分を見つめなおす』私たちに与えられた指令はそれだけ。一年次生から四年次生まで、全く初対面の人とゼロからプログラムを作り上げ、完成させていくのが函キャンなのです。

とりわけ私は中高時代を含め九年以上を同志社で過ごしてきた上、大学ではキャンパスツアーガイドもしているという、自他ともに認める「同志社マテ」。半面、ガイドとしてよく「同志社の魅力とは……」と格好良く語っているにもかかわらず、同志社の「良心」というものの本当の意味をいつも疑問に思っていました。函キャンに参加することとは、この答えを探す私の同志社生活の夢でもあったのです。

同志社の教育をよく表す言葉に、「**個儼不羈**」※があります。私が今回出会った同志社人は皆、たとえこの言葉は知らずとも、その精神をすでに持つ

ている人ばかりでした。その一人一人がつながってできる絆が、同志社なのです。

今回の旅で、私は同志社という名のもとに集う人をたくさん見かけました。毎年函キャンがくる度、忙しい中函館山の山頂まで来てくださる卒業生の方々、寝台列車で通過する青森でりんごジュースを差し入れてく



ださる校友会青森県支部の方々、学生課のスタッフ、そして私たち函キャンのメンバー……。いつとでも同志社という名のもとに集い、語り合える。私は、同志社に育ち、函キャンに参加してかけがえないものを得た気がしました。

この旅で出会えた全ての同志たちに、心からお礼を言いたいと思います。私にとって函キャンは、同志社で学んで本当によかった、そう思えるイベントでした。最高の夏休みになりました。

※何事にも流されない強い自己をもつて

一・二年度向け職業観育成プログラム

就職部では十月から十二月にかけて、京田辺キャンパスで、一・二年度生を対象に職業観育成プログラムを実施する。このプログラムでは「就職するとはどういうことなのか」「どのような心構えが必要なのか」「どのような準備が必要なのか」などについて学内外から専門の講師や卒業生の方々を招いて講演会やパネルディスカッションを開催する予定である。また、今年度はインターンシップに参加した学生たちによる体験報告会も予定している。

プログラムとしては、左記のようなものを予定している。

- 一、卒業生パネルディスカッション
 - 二、インターンシップ参加学生による体験報告会
 - 三、国際機関(国連など)で働くには
 - 四、各業界(公務員、金融、マスコミ)などで働くには
- なお、日時・場所の詳細については近くホームページに掲載する。

第二十四回外国文化週間 「多面体としての戦争」

期間：十月二十九日(月)

十一月九日(金)

対象者：本学学生および教職員、一般

市民

入場料：無料

●講演

場所：恵道館二〇四番教室

時間：十三時十五分

「戦火の中を生きる」 長倉 洋海氏
日時：十月二十九日(月)

「子どもの心象風景としての戦争」
野本 三吉氏

日時：十月三十一日(火)

「戦争と音楽」 清水 穰氏
日時：十一月二日(金)

「戦争と芸術」 椿 昇氏
日時：十一月六日(火)

「サブカルチャーの戦争」を
疑似体験する」 切通 理作氏
日時：十一月八日(木)

●映画

「新しい神様」

日時：十一月五日(月)十三時十五分

場所：恵道館二〇四番教室

●コンサート

『ソウル・フラワー・ユニオン』

日時：十一月九日(金)

十六時三十分 開場

十七時 開演

場所：京田辺校地 多目的ホール

第九回世界湖沼会議協賛

同志社びわこリトリートセンター

環境教育フォーラム

琵琶湖に学ぶ

～水と暮らし～

日時：十月十四日(日)

十三時開場 十三時三十分～十七時

定員：二百五十人

入場料：無料

場所：同志社びわこリトリートセンター

●基調講演

「地球規模で考え、足元で行動する」

河野昭一氏(京都大学名誉教授・国際

自然保護連合委員)

●フォーラム

琵琶湖に学ぶ～水と暮らし～

高谷好一氏(滋賀県立大学人間文化学

部教授)

小坂育子氏(水と文化研究会事務局長

秋山廣光氏(滋賀県立琵琶湖博物館委員

小原克博氏(神学部助教授・司会)

申し込み先：電話 フォクスまたはFAX

で住所・氏名・年齢・電話番号をお申し

出のうえ、十月九日(火)までに左記宛

にお申し込み下さい。なお、定員になり

次第、締め切らせていただきます。

同志社大学企画課

電話：〇七五(二五)四六八〇

(平日九時～十七時)

ファクス：〇七五(二五)三〇五四

E-mail：f.kikak@mail.doshisha.ac.jp

交通手段：JR湖西線北小松駅 快速

停車駅下車徒歩二十五分

北小松駅からシャトルバスを運行しま

す。時間は左記のとおり。

十二時二十分 十三時〇〇分

十三時二十分(予定)

なお、お車でのご来場は、遠慮下さい。

第十六回

同志社学生聖歌隊

同志社女子大学聖歌隊

定期演奏会

日時：十一月十日(土)

開場：十四時三十分

開演：十五時

場所：同志社礼拝堂(チャペル)

入場料：無料

第二十八回 関西六大学 合唱演奏会

関西六大学合唱演奏会は、今年で二十八回目を迎える。関西有数の六つの男声合唱団(同志社リークラブ、関西学院リークラブ、立命館大学メソネルコル、甲南大学リークラブ、大阪大学男声合唱団、関西大学リークラブ)が一同に会して行われる演奏会です。合同ステージは、総勢二百人を超えるメンバーで演奏され、今回は指揮者に

同志社グリーククラブの卒業生で、関西を
始めとして多方面で活躍されている伊
東恵司氏を招きました。

日時：十一月三日(土)

開場：十五時三十分

開演：十六時三十分

場所：フェスティバルホール(京阪電鉄
淀屋橋駅下車、徒歩十分)

入場料：S席二〇〇〇円(座席指定)
S席一五〇〇円(座席指定)
A席一〇〇〇円(全日五時
から座席券交換)

問い合わせ先：関西学院グリーククラブ
TEL/FAX：〇七九八(五)六四七一
E-mail：ecbc9336@kwansei.ac.jp

学術情報ネットワークシステム 利用および運用上の ガイドライン制定について

このたび同志社大学は、本学のすべ
ての構成員が自己責任にもとづき、
ネットワークを安全かつ有効に活用す
るために、「同志社大学学術情報ネッ
トワークシステム(DO-NET)の利
用および運用上のガイドライン」を定
めました。このガイドラインは利用者
の義務・管理者の義務等について指針
を示したものです。

高度ネットワーク社会においては、情
報の選択範囲の拡大・共有化が一気に
地球規模に広がり、多くの人々がその
利便性を享受していますが、一方で匿
名性、開放性、簡便性などにより、多

くの危険性もあわせ持っています。

ネットワーク利用上の行動規範・ル
ールは未確立の状態ともいえますが、
ネットワーク上での行為は実社会と隔
絶したものでなく、また実社会の行
動規範・ルールと全く別個のもので
ありません。

DO-NETの利用にあたってはこ
のガイドラインの定めを遵守すること
もに、その設置の目的が、学術研究お
よび教育、事務利用であるということ
を常に意識し、建学の精神にもとづき
「良心を手腕に」ネットワークを利用・
運用されるようお願いいたします。

URL: [http://www.doshisha.ac.jp/
network/other/kitei/guideline.html](http://www.doshisha.ac.jp/network/other/kitei/guideline.html)
または「総合情報センター」・情報環
境(ネットワークシステム)・学術情報
ネットワークに関する規程類

同志社ホームカミングデー 2001

日時：十一月三日(土)

十時～十七時

会場：今出川キャンパス(主会場)

京田辺キャンパス

卒業生の皆さんにキャンパスに集まっ
ていただき、現在の学園の姿やさま
ざまなイベントを通して、母校とのきずな
を一層深めていただく機会となるよう
願っています。なお、在学生の皆さんの
参加も歓迎します。

DOSHISHA DRAFFERTY 同志社 グラファイティ 第二回

「五平さん」

「五平さん」とは同志社の創生期
に同志社の名物男といわれた賄方
(後に校務である松本五平氏のこと
である。五平氏は同志社のために
全く労を惜しまず、用を命じられ
ば至極迅速に対応したという。彼は
学生のことなど考えていないように
振る舞ったが、それとは裏腹に、学生
に対しては無私の愛をもっていたら
しく、彼に対して不平を言う者はい
なかったという。また、学生が何かよ
からぬことをした場合は「同志社の
生徒はそんなことをするもので無



松本五平(天保年間～1899)信州生まれ。身長は
四尺余と記録されている。墓地は新島襄と同じ
若王子の同志社墓地にある。

い」と言っていたといわれる。つま
り、当時の学生にとっては単なる賄
方ではなく1人の立派な教育者で
あったと言えるのではないかと。

では、現在のキャンパスではどう
だろう。教職員以外にもキャンパス
には大学を構成している大勢の
人々がいる。例えば長期休暇中のキ
ャンパスをご覧になったことがある
だろうか? 樹木の葉や木屑、ゴミな
どが通路に溢れ、カラスなどがさら
にそれを散らかしている状態であ
る。それを休暇明け前にすべて奇麗
にし、ゴミ箱を空にしてくれる人た
ちがいるのだ。我々が日常見ている
美しいキャンパス風景はそんな縁の
下の力持ちとも言うべき人々のおか
げだということを忘れてはならな
い。また、そんな人々のことを見て
何かを感じ取っている学生もきつと
いることだろう。

春学期、百数十人ほどの、とある授業の途中で、表題のような戯れ歌を黒板に披露してみたことがある。学生の反応は予想以上だった。笑みのような、さわめきのような、押し殺したような、しかしきわめて人間味のある表情がさざ波のように、ひととき、教室を包んだのであった。その時は歌が受けたと思ひ、「してやうた」といささか得意であった。

後日談がある。ひとりの女子学生から、「先生は、私たちが授業中にメールを交換していることも、寝ていることも全てお見通しだったので、すね、そういうときの教授には二つのタイプがある、怒鳴り散らすタイプと全く気づかない振りをするタイプと。どちらでもいい影響を与えない。その点先生はどちらでもなく、とても上手に注意された」とお褒めにあずかった。これはまったく予想外であった。

というのは、寝てる学生は知っていたもの、とても静かなクラスなのでよく聴いてもらっている、とお人好しにも、自惚れていたからである。敵もさるもの、私の話など何のその、実は文字メールの交換に熱中していたは！

いつの時代も大学という空間では、教師があたえる情報よりも、学生が相互に発信する情報のほうがインパクトも吸収率も大きい。良い大学に行っていることの最大のメリットは良い友人に恵まれて、知識においても、生き方に關しても良い刺激を受けることにある。そしてメール交換が学生の相互交流である以上、教師の話よりもそれに魅かれるわけである。

これは今も昔も真実である。話を百二十数年前、出来たばかりの同志社に学んでいた生意気な青年、徳富猪一郎（蘇峰）の場合に移そう。同志社は京都最大の私立学校だったとはいえ

着メロに生徒目さましメールうつ よくしゃべる師とよく寝る生徒

当時の学生数は全部で約百人ほどであった。入学直後の印象はかなり悪い。「迷惑を感じたのは、書物の不足であった」「予は別段新島先生には失望しなかつたが、同志社には失望した。予等が熊本にて学んだる洋学校に比ぶれば、とても比較にならなかつた」ともいう。

そんな中に暮らす徳富猪一郎の授業中の態度もなかなかひどい。「聖書の講義の時には小さきストプを巡て、新島先生を中に囲んでいずれも聴いていたが、予はなるべく後にすわり、先生に背をむけて、その講義中には外の事を考えていたから、その講義中では外の事を、実に何等の印象も止めていない」（『蘇峰自伝』）。

たとえ敬愛する先生の授業でも、関心のない科目はつまらないのである。しかしこんな徳富青年にとつても、友人の影響力は絶大だった。山崎為徳からカール・マルクス、エーレンの名を初めて聞き、同じく浮田和民からベンヤン・ピルグリムス・プロタレス、『八犬伝、福沢諭吉の文章に目を開かされた、とその有難さを書き残している。また西南戦争という目前の現実、それを報道した新聞記事を読書室で読みあさり、さらに不足の新聞を読み、外部の博物館に出掛け、ついに予は何時頃より新聞記者たらんと心掛けた。

つまり、モラトリウム期を脱してはつきり自分の将来目的を確立したのであった。こうなると勉学にも身がはいり、「その為には人知れず随分骨を折り、勉強もした、説教めいた一言を加えれば、所詮、勉強は自分のためにするものなのである。

よく私はヤイのホームページの「図書館を見る。探索本についての全国大学図書館の所在状況が、瞬時に、蔵書リスト一覧として出

伊藤彌彦

Yahiko Itoh

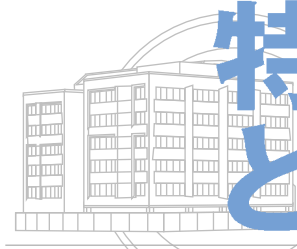
【法学部教授】

1941年東京生まれ。ICU卒。東京大学大学院法学政治学研究科博士課程満了。講義では日本政治史、研究では日本思想史が専門。主著に『維新と人心』（東京大学出版会、1999）、『のびやかにかたる新島襄と明治の書生』（晃洋書房、1999）など。



る。これを眺めているとあたかも各大学の通信簿を見るような気になる。画面に出る今日の同志社図書館はたいへん充実している。明治期の本など全国の大学で、数冊しかないものでも同志社にある場合が多い。同業者からコピー依頼を受けることも起る。仕事上良い大学に恵まれたと思う。この図書館の恩恵は本好きの学生諸君にも及んでいるはずである。他方、現代は情報過多の時代といわれ、その弊害も語られている。そんな時勢だからこそ、その背後に生身の人間を感じながら行われる友人相互のメール交換はインパクトが大きい。「おまやるな」と感じるような、自分の存在性を揺るがすような益友と出会えるのは大学時代である。そして質の高い学生同士が、なかなか本音を分かちあえないのが、実は大規模大学の悩みでもある。願わくば、質の高いメール友をもって欲しいものである。

特殊法人論 と制度改革



行政研究の分野では、近年、行政改革が大きな議論を呼ぶテーマであった。本年一月には新しい中央省庁体制がスタートし、その後成立した小泉内閣は、聖域なき構造改革を標榜して、更なる改革に向けて歩みつつけている。これらの改革がどのような経緯をたどるのかは不透明なところも多いのだが、少なくとも、特殊法人改革だけは、現在進行形であって、何らかの改革は避けて通れない。道路公団や住宅金融公庫など七十七のすべ

てについて廃止か民営化を念頭に、様々な改革提案があり、その着地点を指して関係者はせめぎあっている。

特殊法人とは、形式的には「法律により直接設立される法人」又は「特別の法律により特別の設立行為を持って設立すべきものとされる法人」と理解されている。しかし、実態的には行政組織の延長と考えられるものであり、あるいは、国が直接執行するにほなまない業務を行う必要から、一九六〇年代あたりまでに次々と設立されてきた。立法によって設立されるから、例外はあるが、その設置は当然と思われるものばかりといつてよからう。

この特殊法人が、いまや、諸悪の根源であるかのようにいわれ、無駄遣いと批判され、あるいは官僚の天下り先や子会社による利益の蓄積が指摘される事態に立ち至っている。その原因は多々あるが、一つには政策的な面での陳腐化が、二つには組織的な硬直化が、三つには過度の制度的相互依存性がいまの環境では問題になるであろう。簡単に言えば、かつては必要であったが、今では不要になった事業を継続していること、役所と同様に一旦出来上がった組織やその行動様式を大きく変えまいとすること、そしてこの制度を既得権益とする政官財の相互依存構造があることなどが、原因なのである。

こうした問題は、実は、国の行政や関連する制度にばかりではなく、われわれの社会の様々な側面においても見受けられるし、恐らくその例外はない。例えば、大学を考えてみると、その歴史的な役割は評価されるとしても、それが現代社会の中で存続を許さ

れる大学となる条件については、あらためて検討してみる必要がある。国立大学は独立行政法人化の方向で検討されているが、さて私学ではどうなのであろうか。

いずれにしてもこの改革の時代にあつて、従来の組織や法制度を含めて、われわれの社会制度を基本的に見直す視点が必要であろう。その時に忘れてならないのは、かつて良き制度であつたものが、今もその通りであるのかについての理性的な判断と、仮に改革が必要だという場合に、それが何のための改革であるのかを繰り返し確認することである。大学に即して言えば、学生であれ教職員であれ、大学のミッションを実現していくために、自らを振り返りながら、しかし大胆に進んでいくことが求められているし、そうした活動があつてこそ、意図された改革目標を実現することができるのである。

新川達郎

Tatsuro Niikawa

【総合政策科学研究科教授】

1950年生まれ。早稲田大学卒。早稲田大学大学院政治学研究科博士課程満期退学。専門は行政学、公共政策論、地方自治論。講義では行政管理論、公共政策論を担当。著書に『中央省庁改革』（共著、日本評論社、2000）など。



本学教員の
推薦する

VIDEO

石倉 忠夫
【経済学部専任講師】

「クール・ランニング」で 表現された競技者の心理的課題

スポーツを題材にした映画は数多い。その中でもスポーツ競技の心理問題に触れ、私自身の思い出のページになる映画がこの「クール・ランニング」である。

九八年長野冬季オリンピック。私の所属していた研究室ではリージュ日本チームの心理サポートを担当することになった。リージュユ？リージュ？一般の人とはもとより、開催地である長野市民

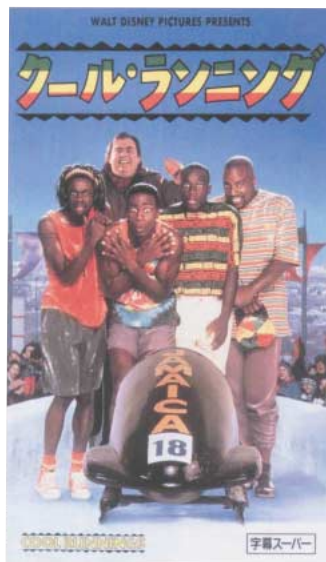
も知らない超マイナーな競技。リージュは水のコースをその上に仰向けに乗って降り、タイムを争う競技である。サポート体制を整える前にリージュ競技の理解が必要であった。

私は日本チームと似たような状況下にあったジャマイカ・ボブスレーチームを題材としたこの映画の存在をそのとき既に知っていた。この映画を研究室のミーティングで紹介したところ、その映画、見てみよう」という話になった。

この映画を知る人は多いと思う。南国ジャマイカの若者達が、全く未知の白銀の世界で開催される八八年カルガリー冬季オリンピックのボブスレー競技に出場するというストーリー。ボブスレーはリージュと同じコースを

箱形のそりに乗って滑走し、タイムを競う競技である。

コミカルな映画とはいえ、スポーツ・タレント発掘、コーチのストレス要因（現地での競技参加への涉外や高額であるそりの購入や助言する内容目標設定、競技に集中するためのアドバイス、トレーニングの工夫、選手のストレス対策（宿舎での過ごし方、他国選手か



『クール・ランニング』

1993年 監督：ジョン・タートルトープ

資料提供：ブエナビスタホームエンターテイメント

らのプレッシャー対策、コンセンストレーションを高めるための心理的テクニックやコース攻略のためのイメージ・トレーニング、シミュレーション・トレーニング、選手対コーチ関係、選手対家族関係、対協会関係などトリアスリートに起こりうる心理的問題が多数盛り込まれている。実際に心理サポート時にも同様の対策がせまられた。よく勉強しているな、というのがスポーツ心理的視点から鑑賞した感想だ。スポーツ心理学の授業で取り上げてみたい映画である。

本学教員の最新刊

（総合情報センター調べ）

政策形成の本質

真山達志 著
成文堂
一、八〇〇円

ベンチャービジネスの
ファイナンス第三版

田中譲 著
きんざい
二、六〇〇円

MINERVA社会学叢書8
現代高校生の計量社会学

尾崎史章 編著
ミネルヴァ書房
三、六〇〇円

グループワークの
専門技術

黒木保博 ほか著
中央法規出版
二、五〇〇円

著作権法講義

仙元隆一郎 著
悠文社
一、〇〇〇円

理工系のための力学

成田真二 著
学術図書出版社
一、四〇〇円

標準材料の力学

藤井透 ほか編
大窪和也 片山傳生 藤井透 執筆
日刊工業新聞社
三、二〇〇円

本学教員の
推薦する

BOOK

井上 勝也

【文学部教授】

創立者新島襄の人と思想を学ぼう

自分が学ぶ大学がどのような建学の理念をもっているかを知り、その大学にどのようなに関わるかによってその大学で過ごす数年間の内実が変わってくる。大学は各々個性、独自性をもっているが、同志社大学はとりわけ明確な建学の理念をもつ大学である。

昨年十一月、同志社創立一二五周年を記念して刊行された現代語で読む新島襄は創立者新島襄（一八四三〜一九〇〇）の書簡、日記、手記、説教原稿、趣意書を『新島襄全集』全十巻から選び、現代語訳をつけたものである。十五歳の新島が安中藩の家老に、国家存亡の今こそ学問をしなければ、時を失うと訴えた漢文の手紙から、一八九〇（明治二三）年一月二日、亡くなる前日の新島最後の言葉まで、約八十点が厳選されて、人間・キリスト者・教育者新島襄を立体的に理解できるよう逐年順に配列されている。また各文章が全集のどの巻ページに入っているかを明らかにし、必要に応じて注やコラムで用語を解説し、略年表、読書案内までついている。編集者は読者が興味をいだいて『全集』で原文を繙き、さらに自分で新島を研究してみようと思うことを期待しているのである。

国家に一分の力をつくさんとして二二歳で密航を企てた新島は誠に波瀾に富んだ四十七



『現代語で読む 新島 襄』

2000年 現代語で読む 新島 襄
編集委員会編 丸善

年の生涯をたどった。彼は高き志の実現に激しい情熱を燃やし、慎重に、誠実に、そして大胆に自分の信する唯一筋の道を歩み通した。日々イエスを模範として生きるキリスト者学生の価値可能性を信じ、クラスで一番できる悪い学生に最も配慮し、彼らを極みまで愛する教育者新島が活写されている。新島は「遺言」の中で、同志社では個個不羈なる書生（信念と独立心とに富み、才気があてず常規では律し難い学生を）を圧迫しないで、できるだけ彼らの本性

にしたがって個性を伸ばすようにして天下の人物を養成すること（現代語訳二五三ページ）と述べている。彼は常規では律し難い個性の強い学生を鑄型にはめ込まないで伸ばし、「ますます良心が全身に充満した青年」（同二四二ページ）を同志社から輩出することを熱望していたのである。

幕末・明治の激動期に君達と同じ青年新島が考え、実行したことを知ることは君達の同志社におけるアイデンティティの確立に寄与すること受け合いである。

国家身体はアンドロイドの夢を見るか
圓月勝博 ほか著
三、六〇〇円

ありな書房

「循環型社会を問う
生命・技術・経済
室田武 ほか著
二、二〇〇円

藤原書店

スポーツの法と政策
佐藤義彦 横山勝彦 真山達志 濱真一郎
太田裕之 上田達子 執筆
二、五〇〇円

ミネルヴァ 書房

法概念と法思考
附・法獲得手続きの合理的分析
アウトル・カフスマン 著
上田健一 訳
二、六〇〇円

昭和堂

初期ネーデルラント絵画
その起源と性格 本文篇
アーウィン・パノフスキ 著
勝國興 訳
中央公論美術出版

初期ネーデルラント絵画
その起源と性格 図版篇
アーウィン・パノフスキ 著
勝國興 訳
中央公論美術出版

（二冊で）七、八〇〇円

民事責任の規範構造
中川淳先生古稀記念論文集
中井美雄 田井義信 編
田井義信 執筆
三、二〇〇円

世界思想社

証券に関する十二章
杉江雅彦 著
二、四〇〇円

萌書房

My Life. 仕事」

が仕事を通して見た「社会」とは？
ことの意義とは？

う先輩の声に耳を傾けながら、
生生活の現実を考える機会にしたいものです。

第13回

My Job
My Life

追われるよりも追いかける。
そんな心がけが、
仕事を楽しくする。

私が勤務する滋賀工場は、全国に五つある
ロッテの工場の中でも、比較的規模が小さな
方です。したがって所属する施設課の仕事
内容も、生産設備の管理および損傷や不具
合の対応など本来の業務のほかに、新製品の
ための新しい生産設備の導入という重要な仕
事も兼ねています。私の担当するのはアイス
クリームラインで、「雪見だいふく」などお馴
染みの冷凍をつくっていますが、毎年、春と
秋に新製品が投入されます。日々忙しいので
すが、この時期がとりわけ多忙を極めます。
発売日が決まると、まず見取りを取って設備
納入業者を決定します。ラインを立ち上げて
からもさまざまなテストを行い、やっとの思
いで発売日に間に合わせます。しかも、かな
り短期間で間に合わせなければなりません。
順調に進まないときは、二十四時間勤務にな

ることもしばしばです。



学生時代は、自由な生活を謳歌していまし
た。クラブ活動はしていませんでしたが、社会
人のサッカークラブに参加させてもらって
いて、授業・アルバイト・スポーツとバランスのと
れた生活を送っていました。就職が決まり、
本社で一カ月の研修を受けたのち、実家から
通勤できる当工場に勤務が決まりました。当
初は、自分の能力にはがゆい思いをしました
が、やがて失敗を重ねるうちに、仕事は追
いかなければ面白くないことが分かってきま
した。仕事に追いかけていたうちは、納
得することはできないし、進歩は生まれてこ
ないのです。「追われるよりも追いかける」、こ
れをモットーに私は仕事に打ち込みました
ところが、そんな私の思いをあざ笑うかのよ
うに、日々忙しさは増していきました。これ

PROFILE

「社会人になって辛いのは、なか
なか長期休暇がとれないことです
ね」と語る堀口さん。学生時代は、
思いつくままに「焼き肉を食べに行
くツアー」を企画。お金もない、計
画もない、気ままな韓国旅行を楽し
んだそうだが、就職してからはそう
いかないようだ。先頃「今年こそ」
と思い立ち、人より早めにゴールデ
ンウィークの休暇をとって、お兄
さんが赴任するドイツに行ったそう
だが、帰ってみると机の上は書類の山。
「休日を返上して片づけましたが、
日々の旅行はそれだけの値打ちが
ありましたね」と満足そうに語る。



堀口 秀隆さん

【1996年工学部 機械工学第2学科卒業】
株式会社ロッテ 滋賀工場 施設課 勤務

はもう個人的な問題でなく、日本経済の問
題なのでしょう。コスト削減のために合理化
される一方、工場が国際標準化規格である
HACCPやISO9001、ISO14001の
認証を取得するたびに、現場の仕事の質を
高めなければならず、今自分のすべきことは
何か、真剣に考えました。そして、仕事の質
の向上に対処するには仕事のプライオリテ
ィを決めることだと気づきました。すべてを
しようと思うのでなく、重要なものから順位
をつけて取り組み、楽しく仕事をすることに
したので。

現実の社会は、学生時代に想像したより
厳しいものです。しかし、学生時代に学んだ
ことが生かせることも少なくありません。た
えば友人たちやサッカークラブでの交流で
得たコミュニケーション力は、職場で円滑な人
間関係を築くのに役立ち、生産性を高め
ることに役立っています。

就職活動で私が重視したのは、業種・業界よりも職種でした。男性と対等の条件で働き、第一線でキャリアを積みみたいと考え、総合職にこだわりました。内定をいただいた企業の中から私が選んだのは、富士通でした。ところが、総合職という条件がそうさせたのでしょうか、配属はなんとシステムエンジニア（SE）でした。当時は文科系学部出身者がSEになるケースはほとんどなく、法学部出身の私にとってはかなり意外な配属でした。新入社員研修では、二進法すらよく理解できていなかった私が、理数系学部出身者と机を並べていたのですから、その苦勞は察していただけたと思います。研修を終えた私を待ち受けていたのは、大手電機メーカーの受発注システムを構築するという大きなプロジェクトでした。三十人のスタッフがチームを組んで開発にあたりました。

My Job
My Life
苦手なコンピュータを克服し
今は営業の第一線で
活躍する。

シリーズ

『ONE PURPOSE』では、さまざまな分野で活躍する先輩を訪ね、毎号「私と仕事」をテーマにお話を伺っていきます。

私と「My Job,」

社会へ出てかれこれ？年。先輩たちあるいは「生きる」

歩んだ道も経験もそれぞれ違
将来の自分にふさわしいキャリア・プランと学



したが、仕事は楽しく遂行することができました。ただ辛かったのが、職業柄どうしても残業が多く、京都から大阪へ通勤する私にはかなりきつい日々でした。
二年半、SEとして勤務したのち希望が受け入れられ、現在の営業職に異動しました。業務の内容は代理店営業です。といっても、自社系列の販売代理店にパソコンを売り込むのではなく、他メーカーの販売代理店に富士通のパソコンを売り込む仕事ですから、そうたやすいものでありません。足繁く通い、話を聞いていただけの関係になるまでが大変です。ただ私のキャリアターが幸いしたのか、それほど時間をかけずに代理店との良好な関係を築くことができました。一見、女性が活躍しているイメージがある業界ですが、営業職に関しては意外なほど少ないのです。先日、行

われた代理店の販売会議にメーカー各社の営業部門も参加しましたが、何と女性は私一人だけでした。そろそろ飽和状態にある市場で十数億円という年間売上目標を課される仕事には厳しいものがありますが、それが励みにもなっています。そこでふと思いついたのが、学生時代に教育実習で同志社中学校の教壇に立ったときのことです。社会の経済を担当した私は、男女別々にアンケートをとりました。テーマは「女性と仕事」で、「将来、結婚しても仕事を続けますか？」という質問を設けたところ、何と半分の女子が「続けたい」と答え、男子の一部からも「続けて欲しい」という回答が返ってきました。その理由もとてもしつかりしていて、総合職をめざして就職活動をしていた私は、逆に励まされたような気分になりました。
先輩の皆さんには、充実した学生生活を送られるとともに、情熱を持って語れるものを持って欲しいですね。

PROFILE

在学中、中田さんは、野球が大好きでよく同立戦の応援に出かけたそう。『野球部関係者にもたくさん友人がいて、神宮球場にまで応援にいきました』と、当時を懐かしそうに振り返る。シドニーオリンピック日本選手団の主将を務めた杉浦選手は同学年、1学年下には日本ハムファイターズで活躍する片岡選手がいる。『彼らの応援を通して、夢は叶うということを学ばせてもらいました』と語る。野球を通して知り合った友人たちとは今も交流が続いているようだ。



中田 恵子さん

【1991年法学部 法律学科卒業】
富士通株式会社 西日本営業本部営業推進部
関西パートナービジネス第二推進部 勤務

お知らせ

ANNOUNCEMENT

障害学生のための支援学生大募集

同志社大学では視覚障害、聴覚障害、肢体不自由など様々な障害を持った学生が学んでいます。学生生活を送る上で、何よりもまず授業を受ける上での「支援」を必要としています。車イス介助やノートテイク(書記通訳)、手話通訳、PC通訳、代筆、対面朗読、ガイドヘルプなど、あなたのできる「支援」で協力してください。

募集内容

対象者: 学期を通じて障害学生の授業補助者として活動する意欲と責任のある人。

活動例: 聴覚障害学生の受講時、となりで先生の話を書きとり(ノートテイク)、講義情報をオンタイムで伝える。視覚障害学生の講義準備・復習のために、講義資料などを対面朗読する。その他、相互の希望に応じて様々な支援活動が考えられます。できる支援で協力してください。

その他: 手話通訳、ノートテイクなど技術を伴う支援については、講習会受講など一定条件を満たした場合、有償化する制度を検討中です(10月下旬決定予定)。

登録方法

締切: 2001年10月10日(水) 17時まで(登録者にはボランティア保険をかける)
上記締切後でも関心のある方は相談に来てください。

場所: 学生課(京田辺)・・・ラウンジ棟1階北側
学生課(今出川)・・・明徳館1階東側

用紙: 記入方法を熟読の上、登録書を提出してください(両校地学生課にあります)。

その他: 下記の説明会・講習会(都合の良い日)に、必ず2回は参加してください(条件)。
※その後、定期的にフォローアップのための講習会を企画しますので続けて受講してください。

お願い・・・学期初めからの情報保障・提供のためにも、できるだけ早期登録してください。

募集説明会・ノートテイク基礎講習会

日程: 10月1日(月)～3日(水) [時間が異なるので要注意]

※いずれも開始後15分程度で募集説明を行い、その後、ノートテイク基礎講習会を実施します。

月日	曜日	校地/場所	時間	※京都市要約筆記サークル「かたつむり」講師によるノートテイク基礎講習会。全日、同レベル内容で実施予定。都合の良い日時・校地で2回以上出席してください。
10/1	月	今出川:扶桑館F107	16:45～18:15	
10/2	火	京田辺:ラウンジ棟201	15:00～16:30	
10/3	水	今出川:扶桑館F107	16:45～18:15	

お問い合わせ先: 学生課(京田辺校地ラウンジ棟北側)

同志社大学派遣留学要項(B日程)

出願期間: 2001年10月11日(木)～10月16日(火) 17:00まで

出願場所: 国際センター国際課(京田辺・今出川校地)

早稲田大学 学部交流学生募集

募集期間: 2001年10月1日(月)～10月19日(金)

詳しくは所属学部事務室または京田辺校地教務事務室へお問合せください。

さよなら WOT企画 ロードムービーの世界

●場所: 同志社大学会館ホール

●料金: 学内関係者 ¥200 学外一般 ¥1000



学生課では、1999年度より大学会館の新たな可能性を模索するため、「木曜日には何かある」を合言葉に、「What's on Thursdays!」(WOT)を実施してきました。2001年度は、3年目の最終年度となり、この秋をもってWOT企画はいったん終結することになります。

そのラストを飾るのは、「さよならWOT」ロードムービーの世界。国内外の名作、秀作7本を集め、さらに、表現空間としての会館機能をフルに活用し、古典芸能・ライブ・パフォーマンス・コンサートをとりまぜてお贈りします。

10月11日(木) 「イージー・ライダー」※16:45 ※19:00
'69年/米/95分 監督:デニス・ホッパー

10月18日(木) 「バリ、テキサス」※15:30 ※18:30
'84年/独・仏/146分 監督:ヴィム・ヴェンダース

10月25日(木) 「ストレイ・ストーリー」※16:45 ※19:00
'99年/米/111分 監督:デヴィッド・リンチ

11月1日(木) 映画『GOING NOMAD』※18:30 **入場無料**
'98年/米/90分 A・ジョーンズ監督来日・舞台挨拶

落語 森乃福郎 開場:16:30 開演:17:00 **入場無料**
場所: 大学会館2Fラウンジ

11月8日(木) 「ともだちのうちはどこ?」※16:45 ※19:00
'87年/イラン/83分 監督:アッバス・キアロスタミ

11月15日(木) 「あの子を探して」※16:45 ※19:00
'99年/中・米/106分 監督:チャン・イーモウ

11月22日(木) ライブorパフォーマンス **入場無料**
詳細未定 チラシ掲示板等でお知らせします。

12月6日(木) 「顔」※16:00 ※18:30
'00年 123分 監督:坂本順次 出演:藤山直美/豊川悦史

12月13日(木) 「EUREKA」※13:00 ※17:00
'00年 217分 監督:青山真治 出演:役所広司

12月20日(木) クリスマスコンサート
「岡本博文 ライブ・セッション」**入場無料**
詳細未定 チラシ掲示板等でお知らせします

お便りをお待ちしています

『ONE PURPOSE』は、学生のみなさんと大学とのコミュニケーションをはかることを目的として発行しています。本誌に関するご意見や企画のご提案、日頃学生生活を送っている中で気づいたことや疑問に思うこと、また悩んでいることなど、さいななことでも結構ですので、どしどし広報課までお寄せください。

ONE PURPOSE

<ワンパーパス>

同志社大学通信128号

2001年10月1日(4・6・10・12月年4回)発行

発行 同志社大学 広報課

〒602-8580 京都市上京区今出川通烏丸東入

TEL. 075-251-3120 FAX. 075-251-3080

E-mail ji-koho@mail.doshisha.ac.jp